



道人
雜誌

私、当雑誌の編集者を務めさせていただいております、享楽と申します。当雑誌をお読みいただき、誠にありがとうございます。

私の段取りの悪さのため、前回から2月ほどの期間をあけ、ようやく第二号の公開にこぎつけることができました。

この場を借りて関係者各位の皆様に、御礼申し上げます。ご協力、誠にありがとうございました。

これから、皆様の目に留まるような雑誌を目指しつつ、向上を図っていきたいと考えております。至らぬ点もございますが、どうか、温かい目で見守ってくださると、幸いです。

それでは、『道人雑誌』第2号を存分にお楽しみください！

— 享楽 —

なお、縦書きでお読みにになりたいかたはこちらをご利用ください

<http://www.mediafire.com/?gsaefp2bt9f8wxr>

作品について

当雑誌では、連載作品と完結作品、また、各号ごとにテーマを定め、そのテーマに沿った作品も掲載しております。

テーマ作品に関しては、作品一覧にて、横に（テーマ作品）と書いてあります。

今回のテーマは、『秋』です。

まだまだ作品数が多いとは言えませんが、ご容赦いただけると幸いです。

1 はじめに

2 目次

3 連載作品

4 完結作品

5 お知らせ

6 終わりに

『駆け落ち』 享楽

『あなたとわたしのタイミング』 ムラムラオ

女は名を明かさなかった。これから常に一緒にいるのだから呼び名には困らない、貴女でも君でも、好きなように呼べば良いと言った。

店を出る。勘定は女が持った。自分の分は自分で出すと言ったのだが、女は頑なに僕の申し出を断った。

「一生自由な生活をさせてあげるって言ったでしょう」

女の一言で片がついたのだ。

夜空を仰ぐと満月が掛かっていた。雲の流れが速い。近くの川岸に生えている柳の枝が、風に遊ばれている。

女が腕を組んできた。そして体を寄せてくる。柄にもなく赤面してしまう。

「ふふ、可愛いよね」

女の声に、朱が濃くなる。

そのまま川岸を歩いた。行くあてなどなかった。ふらふらと、月明かりを頼りに、歩を進めた。半刻ほど、無言が続いた。その間、女は僕に腕を絡めたまま、隣を歩いた。ふと女の方を見ると女は僕の瞳を覗きこみ、やさしく微笑みかけてきた。女の濡れた瞳には、煌々と光る満月が映っていた。

突然、女が僕を引くように歩きだした。訳を尋ねるためにも、僕は口を開いた。

「これからどこへ行くのですか」

「駆け落ちですもの。私たちの望むところ、何処へでもよ」

女は微笑んだまま、透き通るような声で答えた。

「貴女の家はどこに」

「あら、今から何処かへ逃げようという時にお家の場所を尋ねるの。ふふ、面白いひと。ああ、でも、そうね。荷物をまとめなくちゃいけないわね。あらいやだ、私ったら、柄にもなくはしゃいじゃって、ふふ、恥ずかしい」

そう言って頬を染めた女の横顔は、この世のものとは思えないほど美しく見え、ぞっとするほどであった。

「貴方のお家はどこなの」

不意に問いかけられ、狼狽しつつも答えた。

「僕の家、ですか。なぜ」

「荷物、まとめなくちゃいけないでしょ。明日にも使いの者をやるわ。だから必要なものだけ、書きだしておいて欲しいの」

「僕が取りに帰ればいいじゃありませんか」

そう言うと、女は急にムツとした表情を浮かべた。何が気に障ったのか、僕にはわからなかった。ただ分かったのは、女が僕を引く力が強くなったということだけだ。

曇一つない、真っ青な空が広がる日。

午前中の授業が終わり、トモコとユキエはいつものように大学内の広場に座り込んで昼食をとっていた。

「ユキ、これあげるよ」

ハンドバッグから小さな紙箱を取り出し、そこからさらにゴツゴツとした焦げ茶色のドーナツを取り出してトモコが言う。

「えっ、いいの？」

「うん。今日ここ来るときにさ、100円セールやってて思わずたくさん買ってきちゃったんだ」

トモコが箱のふたを広げると、そこには7つほどのドーナツがわんさかつみ上がっていた。

「でも……」

「どうせ私一人じゃ食べきれないよ。それに、無理して食べても太っちゃうし」

「あっ、そうだよ。トモ彼氏いるもんね」

トモコの恋愛事情を察して、というより思い出してユキエはドーナツを受け取る。

もうだいぶ前から付き合っているらしいのだが、中々近況を話してくれないので忘れかけていたのだ。

「うん、一応ね」

自身も細くて白いドーナツを手にとりながらトモコは小さく頷いた。

「一応？ もしかして破局寸前なの？」

「違う、もっと酷いかも」

「もしかしてフラれた？」

もしやもしやとそこそこ豪快にドーナツを咀嚼しながら、ユキエはトモコの顔をのぞき込む。

「ううん。フラれてすらいない」

「どういうこと？」

「会えないんだ」

言いながら、トモコはハンドバッグに手を突っ込み、少しまさぐってから携帯を取り出す。

「会えないって？」

そのまま軽快な音を立てて開かれ、疑問を浮かべたユキエの顔前に突き出された携帯の画面に映っていたのは、メールの送受信ボックスだった。

「見てみて」

「うん」

突き出された携帯を受け取って、しばらくボタンを押しながら無言になっていたユキエだが、その表情はどんどん曇っていく。

「これって……」

「ユージいつも仕事で忙しいみたいなの。最近全然会ってないんだ」

「だけど、いくらなんでもこれは……」

苦笑するトモコだが、ユキエはとてもそんな気にはなれない。

「『仕事だごめん』『仕事だごめん』『仕事だごめん』……って全部仕事でデート断わられてるじゃない！　もしかして付き合い始めてから一回もデートしてないの？」

「うん。一応ね」

「トモ、アンタ少しは怒った方がいいよ！　彼氏が浮気してたらどうすんのさ!？」

手に持った携帯電話を勢い良く振りながら、ユキエは声を荒らげる。

トモコの言った『破局寸前より酷い』という言葉の意味が痛いほどよく分かる。

これでは付き合いしている意味が無いではないか。

トモコがそんな中途半端な付き合いによって、そこから生まれる寂しさに苦しめられていると考えたと、とてもじゃないが冷静でいることはできない。

「うん、確かにユキの言うとおりでと思う。でも、ユージ仕事がすごく上手くいってるみたいなんだよ」

怒るユキエをなだめながら、トモコは笑いながら携帯電話を閉じた。

「トモの彼氏って、外資系だっけ？」

「うん。最近業績がすごい伸びててとっても忙しいんだって」

その笑顔の中に、かすかな寂しさがあつたのをユキエは見逃さなかった。

「でもさ、少しぐらい休みは貰えてるでしょ？　流石に365日全部が仕事ってわけじゃないんだし」

「そうなんだけど……」

「だけど？」

消え入りそうな声のトモコの顔を、ユキエは再びのぞき込む。

「タイミングが合わないの」

「タイミング？」

「うん。もう滅茶苦茶に合わないの」

「どゆこと、それ」

「例えばさ」

トモコはコンビニでおなじみのサンドイッチの袋をゆっくりと開き始める。

「ユージが予定空いてる日には、私の方に必ず予定が入ってるの。外せない大事なゼミとか、テストとか」

「そんなの、たまたまでしょ」

「ううん。もういつもそうなんだ。付き合い始めてから予定が合った試しがないの」

間に卵を挟んで、二枚のパンがピッタリと張り付いているサンドイッチ。

それを両の手の平で抑えながら、トモコはため息をつく。

「こんな風にピッタリと二人のタイミングが合ってくればなあ……」

やはりトモコはストレスを感じているらしい。

力が込められて間の卵が若干飛び出している。

そんなトモコを気の毒に思ったユキエは、ある提案をすることにした。

「ねえトモ。アタシそれならいい方法知ってるよ」

「えっ」

言いながら、ユキエは思い出していた。

どんなタイミングも合わせてくれる、『合わせ屋』の存在を。

○

この世の中には、タイミングが合うことで得をする人間が数多くいる。

例えば、野球選手はホームランを打てるタイミングを欲するだろう。

例えば、デイトレーダーは自分の株が最も高く売れるタイミングを欲するだろう。

例えば、政治家は自国が有利になるような戦争の起きるタイミングを欲するだろう。

とにもかくにも、すべての人間は自分に都合よくタイミングが合うことを欲する。

そして、そんな欲求にこたえる人間がいる。

それが『合わせ屋』である。

○

「実は結構有名なんだよ。あの某有名野球選手も、その人に会ってから打率が倍以上になったって」

「本当にそんなことがあるの？ 都市伝説じゃないの？」

「確かに、実際に『合わせ屋』に会ったことがある、って人の話は聞いたことがないよ。けどさ、

火のない所に煙は立たぬ、とも言うじゃん」

ユキエが『合わせ屋』の存在を知ったのは、数年前にある週刊誌でたまたまその特集記事を読んだ時である。

記事によると、業界で成功しているすべての人間は『合わせ屋』というものに遭遇して、ここぞという時のタイミングを合わせてもらっている、と言うのだ。

確かに成功のための勝負というものにはタイミングが付き物だ。

サッカー選手がシュートをゴールに決められるのも、ここぞというタイミングでボールを蹴っているからである。

けれど、その記事はあくまでも推測を押し並べているだけだった。

実際に『合わせ屋』と会った人間は誰もいないらしい。

それでも、当時は大いに話題となったのである。

いつしかその噂には、尾ひれがつく。

「この大学の近くにさ、〇〇百貨店ってあるじゃん。そこの屋上でたまーにやってるらしいよ」

「本当に？」

「本当かどうかはわからないよ。トモの言うとおりに、今じゃすっかり都市伝説の一つになっちゃって

るから」

「ユキは行った事ないの？」

目を輝かせ始めたトモコに、ユキエはため息まじりに答える。

「行ったよ。だけど、会えたことはないね」

「そっか」

「ま、運試しと思って一度行ってみなよ。もしかしたらいるかもしれないじゃん？」

「うん。ダメ元で行ってみる！」

ようやくトモコがひまわりのような笑顔を取り戻し、元気になってくれたのでユキエはほっと胸をなでおろした。

トモコもトモコで、ユージと会えるかもしれないという見通しが立ち、心が弾んでいる。

しかし、空が次第に曇り始めていた事に2人はまだ気づいていなかったのである。

続

『夢で出会った少女に恋をした』 享楽

『そばせい』 やない

『跳ねる金魚』 蟻戸諒一

『秋の魔女』 蟻戸諒一 (テーマ作品)

夢で出会った少女に恋をした——

出会ったのは神社であった。私は長い石段を上っていた。ふと、蝶が一匹、石段の中心でなにやらふわふわと飛んでいる。

「どうしたのですか」

声をかけると、蝶はこう答えた。

「いやね、他の蝶がしっかりと列を成して飛んでいるかを見ているのです」と。

なるほど、確かに、その蝶ををちょうど、ひし形の一つの頂点とし、その対角に神社の鳥居、左右で他の蝶たちが別の角を作って飛んでいる。

私は石段の上、森に囲まれつつ控え目にその姿を見せる神社を仰ぎ見た。

少女に出会った——

その神社で出会ったのか、別の場所に出会ったのかは定かではない。

私は、街中を、何か、その少女を助けるために歩き回っていたようであった。記憶はここで飛ぶ。次に気がつくとき、私はその少女と共に道を歩いていた。夕暮れ時の道である。左右は田んぼや荒地、おそらくは田舎の道であったであろう。街灯はなく、暗い。しかしアスファルトで整備された車道に、歩道があった。

思えば、この時、私はすでに少女に恋をしていた。

歩道を一緒に歩いていて、何らかのやり取りをした。

左右から車が来ていないことを確認し、少女は

「渡ろっか」

と私に言った。一緒に、バス停まで歩いていたのである。

その時私は、少女に、私の町行きのバスはこっちであっているのかと尋ねた。

バス停に着くと、すぐにバスが来た。少女がバスに乗り込む。中には、制服を着た女の子が数人いたように思える。

このまま別れてしまう、もう会えないかもしれない……。そんな思いが私の胸をよぎった。次の瞬間、私は少女を呼び止め、その唇に接吻した。

少女と頬笑みを交わした後、バスの扉が閉まった。発車した車内では、少女が他の女の子に質問を受けていたようである。

少女と別れた後、私は道を適当に歩いていた。かなり暗くなっていた。どのような道であったか、周囲の風景はどんな風であったかなどということは覚えていない。

少し行くと、私のもとにバスがやってきた。

中には少女が乗っていた。

私は嬉しかった。また、その少女に出会えたことが、たまらなくうれしかった。

迷わずバスに乗り込むと、バスの窓から見える景色が真っ暗闇になった。車内も、何となく薄暗い

。自分が立っていたか座っていたかは定かではないが、少女は最前列の右の席に座っていた。表情がうかがえないことが、私の不安をあおった。

そのバスは、最初、最初に夢に見ていた神社がある山に向かっていった。暗闇の中、その風景だけは鮮明に見えた。

気づくと、バスは山に登るのではなく、山の中を突っ切っていった。ちょうど、トンネルをくぐるように。この時体に少し抵抗を感じた覚えがある。と同時に、なぜか、この暗がりを通るということは、私はもう死ぬのだ、私の生きた世界からはお別れをしなければならないのだという感に襲われ、少し、悲しくなった。

そこからは覚えていない。目が覚めたからである。そこから二度寝したときにも夢を見たが、少女はそこにはいなかった。その夢も確かにすばらしいものであったが、私には、少女に出会うことのほうが、よっぽどすばらしいことのように思えたのだ。

願わくは、もう一度、いや、一度と言わず、何度でもあの少女に会いたい。たとえ二度と目が覚めなくなって、夢の中に永住しようとも、私はあの少女に会いたい。

私が真に恋をした少女に再び出会えることを願って、私は筆を執った。

私は夢で出会った少女に恋をした——

すきな食べものなんですか？

ステーキにおさしみ、サラダにお米。

すきな食べものなんですか？

むかしは「そば」が人気でした。

ずるるっずるずる。

ずるるっずるずる。

ここは人気のそば屋さん、みんなこぞってそばを食べる。

ずるるっずるずる。

ずるるっずるずる。

「おいおい見てみろよ、賭けそばをやってるぞ」

「ほんとうだ、おいみんなきてみろよ」

賭け事なんて日常茶飯事、今日も掛けそばがはじまります。

「おれは昨日はじめて八つ食べたんだ。だから九つ食べたら金をくれ、食えなきゃお金を払うから」

「九つ？ もりを九つもかい？ ふくねえ、よしいだろう。一円掛けるよ、やってみな」

男ははしを手にとると、いきおいよく食べ始めます。

ずるるっずるずる。

ずるるっずるずる。

「いい食べっぷりだねえ、おい。 おいおいまずいぞ、こりゃとられるね」

ずるるっずるずる。

ずるるっずるずる。

「ぶはあー。あーおいしかった」

「なんてこったい。もう九つ食っちまったのかい。なんて男だ。ほらやくそくの一円だよ。ちくしょー

め」

「どうも、まいど。またよろしく」

「二度はねえんだよ」

つぎの日。

「今日もきたよ、だんな」

「へへへ、今日もきやがったのか。ばかだなあ、今日こそとられるともしらねえで。やい、今日は十

一食べ。そうでねえと賭けにはのらねえぞ」

「十一？ きのうで九だったんだぜ？ 十一なんてとてもむりだよ、十にしてくれよ」

「だめだ、まけない。十一だ、十一で二円の賭けだよ。ふふふ、きょうこそきっととれるぞ」

「しかたない、はじめるか」

ずるるっずるずる。

ずるるっずるずる。

「へへへ、くるしそうな顔してやがんな。みろよ、八つくったらもう顔があおいよ。これはとれるね」

ずるるっずるずる。

ずるるっずるずる。

「へーねばるね、九たべやがった。おいおい十もくった。まさか、まさか……なんてこった十一たべやがった」

「だんな、やくそくの二円をたのむよ」

「ちくしょーめ、なんてこった。あしたこそ勝ってやるからな」

その日のよる。

「だんなさま、あなたはあの男のこと知らないんですか？」

「あのそば男かい？ しらないよ、有名なのかい？」

「あらら、あの男のことも知らずに、掛けそばに手を出してたなんて、とんでもない。あの男はね、おそばのせいさん。人よんで、そばせいっていうのよ」

「へえーえ、たいそうりっぱな名前があるじゃないか」

「せいさんはね、そばのもりを五十食べるのよ」

「五十？ なんてこった、それじゃ、あしたも、あさっても、しあさっても賭けにまけるよ。たいへんだ」

「ほんとうにぬけてるねえ、だんなさまは。あしたは五十一で掛けてごらんなさい、きっと勝てるから」

「そうかな」

つぎの日。

「きょうは五十一食べてもらうぞ、せいさん」

「ありゃ、ばれちゃいましたか」

「ばれちゃいましたか、じゃないよ。おまえさん五十たべるんじゃないか。その男が十だの十一だのでお金をとっていくってのはひきょうだね。きょうはね、五十一たべてもらいますよ。五十一で五円の賭けだよ」

「まいったなあ、どうも。五十たべるのだって、からだのちょうしがよくないと食べられないんだけどなあ。きょうはちょうしがわるいから、四十でかんべんしてくれませんか」「もうその手にはのらないよ、せいさん。きょうは五十一だ、ひとつもまけない」

「うーん、じゃあひとつ」

ずるるっずるずる。

ずるるっずるずる。

「へえー、十、十五、二十、あつという間になくなっていくな、二十五。やっぱりきのうまでのほうそだったのか」

ずるるっずるずる。

ずるるっずるずる。

「おどろいたなー、四十。四十三、くるしそうだな、四十五。手がふるえてるよ、四十八、おいおいまずいぞ四十九」

ずるるっ。

「へへへ、ようやく手がとまったな。あぶねえ、あぶねえ。しかしよく食べたよ五十もさ、まあきょうはおれの勝ちということで」

「なんの、まだまだ」

ずるるっ。ずるるっ。

「うへえーなんてしゅうねんだ。食べちまったよ、五十一。ちくしょー、今日もまけちまったな」

この日をさかいに、せいさんがいなくなる。せいさんは、おそばのふるさと信州へ、そばしゅぎょうの旅にでたのだった。

「やっぱり信州はおそばのくにだな、いろんなそばがあるもんだ。でもまあそろそろ江戸のそばも食べたいなあ、よし江戸にもどろうか、うん？ あれは、おいおい大蛇がいるよ」

たびのとちゅうのせいさんが見つけたのは、大人二人ぶんの大きなヘビ。それが人を食べている。

「うわあ、ヘビは大人でもべろっと食べちまうんだなあ。あれ？ なんかの草をなめてるぞ？

へえー、あの草をなめたら、蛇のおなかがすーっとへこんだよ。とけたんだね、食べてたものが」大蛇がどこかへいくのを待って、せいさんはその草を手にししました。

「さてよ、これさえあればいくらでも掛けそばができるぞ。お腹がいっぱいになったって、この草をなめればいいんだ。へへっこれで家がたつぞ」

つぎの日。

「ああせいさんじゃないか、もどってきたんだね」

「やあ旦那、またかせがせてもらうよ」

「ふくじゃないか。でもねえ、まえみたいにはいかないよ。きょうは七十、これで十円の賭けだ」

「いいともさ」

ずるるっずるずる。

ずるるっずるずる。

「おいおい、えらくかんたんに引きうけちゃったぞ、おい。まさかきょうも負けるんじゃないだろうな」

ずるるっずるずる。

ずるるっずるずる。

「ひえーはやくも四十、四十五、すごいね五十、どうなってんだ五十五、六十」

ずるるっずるずる。

「あれ、でもやっぱりおそくなつたね、六十二、六十四、むりしないほうがいいよ六十六」

ずるるっ。

「六十七、もう顔がまっさおだよせいさん、六十八。あ一ついに手がとまったね」

「うう、うー」

「ほら、もうむりだって。きょうはあきらめな」

「いや、いいんだ。たべるから、たべるからちょっと外へ行かせてくれないか、風にあたれば食べられるはずだから」

「ほんとうかい？　しょうがないねえ、ほらいっといで。でもあんまりおそいと賭けにならないよ」

「わかってる。ほんのちょっとだけだから」

「なにやってんだろうな、せいさん。なんかなめてるんだよ、草みたいなの。おーいせいさーん。

あれ、きえちまった、せいさんがどっかにきえちまったぞ。あれ？　せいさんのふくがある、中にはそばがぎっしりあるよ。せいさん、どこいったんだろうなあ」

せいさんが見つけた大蛇のなめていた草は、食べたものをとかす草ではなくて、人をとかす草だった。だから、そばはとけずにせいさんがとけて、ふくがそばをきていた。

愛って大事なんだなあ。大学に入ってからそのことばかり考えている自分がある。高校の時の彼氏とは、受験が始まってから自然消滅してしまった。本当は受験の真っ盛りの時に一度会ってセックスをしたけど、そこに愛はなかったと思う。彼は駅前で私を見つけると、何も言わずに歩きだした。私だって、乙女心は失っていない。淡い気持ちもあった。だから、彼がラブホ街に直行したときはさすがに引いた。どん引きした。

彼はへたくそな前戯のあとにでたらめに腰を動かした。冷めた気分の私は、めんどくさくて、テキストに喘いでいたと思う。彼のモノが私の中で動くたびに英単語がシートの上でしわくちゃになっていくようで、いらいらした。彼がホテル代を割り勘にしようとか言い出したので、さすがの私も、中学生のときに弟を泣かして以来封印していた禁じられた平手を繰り出した。

そんな私だから、一生彼氏なんてできないのだろう。講義の最中にいちゃついているカップルを見たりすると、特にそう思う。あんな愛で満足できたら苦労しないわ、と少し気取っていたりする自分を見て、さらにへこんだりする。

もちろん、気になる人はいる。文芸サークルの先輩。柔らかい天然パーマの栗毛に、笑うとできるえくぼ。いわゆる草食系男子のおしゃれな眼鏡。見た目だけでも完璧なのに、喋るとなんだか居心地がよくて、胸の奥が熱くなってくる。やっぱり恋人にするなら年上に限るのだ。

でも、これって愛なのかしら。私の悩みは、やっぱりそこだ。私は頭が悪いからよくわからない。コンビニのバイトでもへまばかりするし、お題小説だっていくら書いても部誌に載せてもらえないし、結局今の大学だって滑り止めの私立大学だ。

でもでも、いつか本当の愛、ってやつを見つけられると信じている。のかなあ。

夏休みが来てから、私はなんだか焦り始めた。彼氏はいないし、友達はみんな帰省しているしで、スケジュール帳が真っ白なのだ。お父さんに無理やり頼みこんで勝ち取った一人暮らしも、こうなるとたださびしさを倍増させるだけで、無性に外に出たくなかった。けど、結局行くあてはなく、友人

がメールで「田舎は暇だぞ、ボケ」と送ってくるのに、「都会も暇じゃ、アホ」と返すだけだった。懐かしい音が聞こえたのは、夏休み三日目、いつも通り掃除しかやるのがなくてテレビの前でぼんやりとしていた午後のことだ。ぼん、と空気を叩く音がして、ベランダの向こうを見ると、空に灰色の煙がもやもやと漂っていた。号砲の二文字が窓に貼り付く。お祭りをやるぞー、という合図だと、お母さんが言っていたのを覚えている。

お祭りなんて一人で行っても空しいだけじゃないか！ と自分に突っ込みをいれたのは祭りの会場を三周してからで、私はカップルの群れに囲まれてはあたふたし、浴衣姿の女の子を見つけては三枚二千元で買った自分のシャツに複雑な思いになった。

こんなはずじゃなかった。素敵な出会いを考えていたんじゃない。祭りに来ればさびしさを吹き飛ばしてもらえると本気で考えていたのだ。

馬鹿だなあ、私は。今は思想も末法、穢れに穢れたカップルどもがはびこる二十一世紀でありんす。祭りなんてとっくに奴らに支配されて、お一人さまのサマーなんてどこにもありゃしないのさ。

なんて、我ながらポエジーな脱力に浸っていると、祭りの出口が見えてきた。数時間前にそこに立

っていた時はまだ浮かれていたのに、今のこの沈んだ気持ちはなんだ。家に帰ったら不貞寝だ、それしか残された道はない。

「我が逃走と名付けよう……」

自嘲気味になりながら出口にさしかかったとき、ふと、赤い着物の裾のようなものが目の前で揺れた。思わず立ち止まって目で追いかけると、それは人ごみのなかをふわりと漂い、何かに引っ張られるように消えていった。まるでモノクロ映画の世界でひとつだけ色づけされた物を見るように、その赤さだけがはっきりと際立っていた。幻覚だとは思えず、私は人ごみをかきわけてその屋台に近寄った。

金魚すくい屋台だった。水色の水槽の中で、赤い鱗を纏った金魚たちが気持ちよさそうに泳いでいる。ときどきうすいひれをぱたぱたと動かす姿がかわいくて、私はつい座りこんで眺めてしまった。金魚はそんなに詳しくなかったけど、たぶんこの子たちは姉妹だな、と思った。なぜ女の子と決めつけたのかは、今になってもよくわからない。

「金魚好きかい」

「え？」

顔を上げると店主の男性と目が合ってしまった。

「まあ、バツタよりは好きっす」

「やってくかい、一回百円」

「はあ、まあ、一回だけなら」

金魚なんて飼い方もわからないし、生き物を飼うことにトラウマのある私は本音を言うとやりたくなかったけど、長居してしまったきまぐさから百円玉をおっちゃんの手に乗せていた。虫でも、犬でも、金魚でも、生き物を飼うということはそれなりの責任がついて回る。私は小さいころに猫を殺してからというものの、生き物を飼わないことに決めていた。

「おっちゃん、あたし、もう生き物飼いたくないんすよ」

「ほう、そうかい」

ビール缶に口をつけながらおっちゃんは相槌を打った。岩みたいにごつごつした顔が赤く染まり、風船みたいだった。

「小学校の時に猫が私のせいで死んじゃって、それ以来、学校の飼育当番でうさぎに餌あげるたびにびくびくしてたくらいなんすよ」

掬うならどの子にしようか考えながらポイを人差し指と親指の間でくるくる回した。あの子もかわいいけどでかい……あの子はちょっと病気みたいな色だし……あの子は目が大きくて弟を思い出すからやだな……。

「でも将来、素敵な旦那さんと結婚して、男の子なんて生まれたりしちゃったらですよ？」

「おう、しちゃったら？」

「ジョーソーキョーイクのために犬くらいは飼ってあげたいなあ、と」

水に入れると紙がふやけたので、慌てて取り出す。これはひどい安物に違いない。

「だからこのたび、見事に金魚を掬えたらトラウマを克服することにします」

「がんばれよ」

「はいっす」

私は鼻から思い切り息を吸い込み、とめてみた。そっちのほうが集中できる気がした。

狙いは手前でじっとしている子だった。理由は、身体も小さいし、掬いやすそうだったからだ。後ろからそっと網を入れ、紙がふやけて溶けそうになる一歩手前で、一気に掬いあげた。取った、と思った次の瞬間、金魚は予想外の動きを見せた。それまで死体のように動かなかった彼女は突然狂ったように暴れだし、尾びれで私に向かって水をかけた。ひるんだすきに金魚は紙を突き破って水面に落ちた。すいーっと赤い鱗が水の中を進み、群れに交じると見分けがつかなくなった。

「ちくしょう……」

「はっはっは」

大きな身体を揺らしておっちゃんは笑った。

「まだやるかい」

「けっこう」

私はキャップを深くかぶりなおして、おっちゃんにお礼を言った。そして、お椀を返そうと手を水槽の上に伸ばした時、驚くべきことが起きた。

ばしゃ。

お椀の中から心地よい水音が響いた。お椀の中を覗き込んで、私とおっちゃんは目を丸くした。さっきまで水しか入ってなかったお椀の中に金魚が浮いていた。赤くて、身がきゅっと引きしまっていて、いかにも金魚、というべき子だった。

「運よく跳ねて入ったんだなあ」

おっちゃんは目を細め、また笑った。酔っているらしかった。お椀を掴むと、紐の付いた少し厚めのビニール袋を一枚とって、その中に金魚を入れた。

「え、いいんですか？ この子結構上物ですよ？」

「おう、もらっちまえ」

まだ飼うかどうか決断しきれない私に金魚を押し付けると、おっちゃんは立ち上がり客引きを始めてしまった。仕方なく、その子を連れて帰ることにした。

帰り道、水の中でのろのろと泳ぐ金魚をずっと眺めていた。綺麗な外見をしている割には案外マイペースな子だった。

アパートの鍵を開け、ただいま、という。空しくなるけれど、いいのだ。今は、空しさに浸る時間なのだから。なんだかバイトの時よりも疲れた気がする。時給に換算したらいくらになるだろうと帽子を脱ぎながら考え、くだらなすぎて止めた。

その時ようやく家に水槽がないことに気付いた私はやっぱり馬鹿だった。金魚を見ると、心なしか元気がないように見えた。それだけはいやだ。私の馬鹿で死ぬのは、困る。私は部屋を漁り、水槽のかわりになりそうなものを探した。でも、そんな都合よく中身が空っぽの入れ物なんてない。見つかるのは木箱とか、段ボールとかで、水を入れてもすぐに漏れ出してしまった。

台所で木箱から水が漏れるのを見ながら、猫が死んだ時のことを思い出して涙が出そうになった。小学校から帰ってくると玄関に猫が倒れていた。おばあちゃん猫だったし、毛並みもぼさぼさで、あまり好きじゃなかった。両親が帰ってくるまで、猫の死体が隣にあった。本当は部屋で宿題をやっていたのだけれど、落ちつかなくて彼女の隣に座ったのだった。死体はぬいぐるみのようだった。寝ているだけなのだと思った。でも、だんだんとわかってきた。彼女はもう死んでしまったのだと。一人

で家を歩きまわり、辿りついた玄関で息を引き取るなんて、こんな死はさびしすぎる。彼女の死に顔が目に焼き付いて離れないのは、その印象のせいだろうか。夕方、死体を庭の柚子の木の下に埋めて、皆さびしい顔をしていた。翌日から、私は一週間も学校を休んだ。部屋に閉じこもり、ご飯もろくに食べなかったから、お母さんは泣いた。一生休もうと思っていたけど、最後にはお父さんにいい加減にしろ、と頭を叩かれて、学校に行った。クラスみんながやさしく迎えてくれた。私は愛されているのだと、全身で実感できた。

水道にぶらさがった金魚は、半透明な水の中でぴくりとも動かなくなった。

私は、手にしていた厚底鍋を持ったまま、台所に立ち尽くした。おかしい疲労感ばかりが足の裏からじわじわと這いあがってきた。鍋に水を注ぐと、その中に金魚を入れた。金魚の薄いお腹が水面で揺れるのには、なんともいえない気持ちにさせられた。私はしばらく彼女の綺麗な鱗をぼうっと眺めた後、鍋を流しに置き、居間に戻った。ソファの上で毛布に丸まり、冷房をがんがんにかけた。テレビも音量を最大にし、クッションに頭を押し付けて声をあげて泣いた。どうして気付かなかったのだろう。金魚も、人間も、綺麗な水がなければ生きていけないというのに。

「跳ねる金魚」――了――

蝉の鳴き声が耳の奥で響き続ける。秋分は一週間前に過ぎたというのに残暑は続き、最高気温は更新されていく。しかし、この蝉の声が無くなってしまうと思うと、少しだけさびしい気持ちにもなる。そんな時、決まって叔母のことを思い出すのは、他界したのが秋だったからだろう。

今から十五年も昔のことだ。彼女は大学四回生の春にアメリカ大陸の横断に飛行機に乗り、そのまま行方不明になった。その頃のアメリカはU F O関連の噂の尽きないオカルト大陸だったこともあり、若い女子大生の失踪はニュースでも幾度か取り上げられたが、手掛かりが少ないことから、ブラウン管にはまたノストラダムスの予言番組が帰ってきた。

半年が経った夏の日、スーツケース一つを抱えて叔母は帰ってきた。家には祖父と私しかいなかった。父は仕事に出ていた。母はお昼の買い物に出かけていた。祖父は縁側でうたた寝にふけており、迎えに出たのは私だけだった。事の重大さに気付いていない私は、ただ大好きな叔母が帰ってきたことに喜ぶばかりだった。

「ただいま、ゆーくん」

「おかえりキミちゃん」

君子というのが叔母の名前だった。キミちゃんというのはあだ名で、母に倣ってそう呼んでいた。叔母がスーツケースを降ろす時にブラウスの胸の隙間から白い下着が見えた。胸の谷間におかしな紋様があることに私は気付いた。ちょうどみぞおちの真上だ。

「それなに？」

叔母の胸を指さした。彼女は気立てが良く、幼い私の言うことにもいちいち耳を傾けてくれた。血のつながりのある私からも、屈託なく美しいと思えた。

「おっばいがどうしたの？」

「これ」

紋様に手を近づけると、不敵な笑みを向けられた。叔母は胸を張って、大事なものを扱うようにそこに手を置いた。

「これはね、まほ一つかいのシルシ」

「シルシ」

「そうそう。君子さんは海の向こうでまほ一つかいに弟子入りしてきたのだ」

そう言うと、框を越えた。私は後ろからついて行った。縁側で船を漕いでいる祖父に挨拶をし、冷蔵庫の麦茶をそのまま口をつけて飲み、叔母は自分の部屋に入って行った。部屋までついて行くと叱られるかな、と思っていると、階段を駆け下りてきて、「臭い！ 臭い！」と連呼した。

「ゆーくん、私の部屋めっちゃ薬臭いよ！」

「お母さんも言ってた」

「なんでホルマリン洩れてんのにそのまんまにしてんのさ！ 扱いひどいから蛙ばらばらだし！ シックハウスになるよ！」

「帰ってくるまではそのままにしておくって」

「誰が？」

「お母さんとおばあちゃん……」

「そか」

少し心の読みとれない笑みで私の頭に手を置くと、廊下を通り過ぎてそのまま玄関に立った。主人を待つスーツケースが床に倒れていた。

「じゃあ、また旅に出ようかな」

「大学は？」

大学。食卓にきんぴらごぼうと一緒に置かれる言葉だった。叔母は困り顔でタンイやホコウなど幼い私には難しい言葉で説明した。最後に、

「子供がそんなこと気にするんじゃないの」

と笑い、私の目線にしゃがんで頭を撫でてくれた。

そのまま叔母は熱い路上に舞い戻るかに思われたが、そうはならなかった。本当に偶然に、父が時計を取りに家に戻ってきたのだ。彼女は冷静だった。突然背後に現れた義兄にゆっくりと一礼して通り過ぎ、脱出成功となるはずだった。が、門の前で自転車かごに牛乳パックやら大根やらを入れた母に出くわし、退路は断たれた。

その夜は長い家族会議になった。叔母は母に叱られた。食卓を挟んで二人は向かい合い、母の怒鳴り声だけが家に響いていた。母の怒りの高まりたるや、虫の音さえも息をひそめるほどであった。が、幼い甥の目から見ても叔母は懲りていないようだった。警察の聴取にも「いやあ、ご迷惑をおかけして」と、まるで他人事だった。

女子大生アメリカ失踪事件はこうして幕を閉じた。こんな出来事が、私が大学に合格するまでに数回あった。中国の山奥、北海道の古代洞窟、ガラパゴス諸島……。叔母が実際にそこを訪れたかどうかは確かではないが、彼女は旅立つ前に必ず眠い目をこする私を玄関に立たせ、その場所に行くと言った。祖父の死後、アパートに引っ越してからもだ。

プリーズ
「起きて」

流暢な発音の英語に薄目を開けると枕元で叔母が私の顔をのぞきこんでいた。

「叔母さん」

「おばさんはヤメテ」

叔母の笑顔が凍りつくのがわかり、「君子さん」と訂正した。叔母は目を細め、嫌がる私の頭を撫でた。ふとももに目が向きそうになり、必死にこらえた。彼女は両手で私の髪をかき混ぜながら、こんな大人になるなよー、と言った。絶対にならない、と言った。

「また旅に出るよ」

そんな気がしていた私は、彼女を引きとめたい気持ちに反抗したくて、寝返りを打って布団に隠れた。別れの時にしか会いに来ない彼女も憎かった。次に会えるのは短くても一年後だ。母は最初的一件以降叔母のことを気にかけなかった。諦めたようである。私が彼女の立立を告げても、苦笑いするだけだった。「昔からそうなの。人の言うことなんて聞かないの」だそうだ。

「お見送りしてよ」

「やだよ、眠い」

「何言ってるの、もうすぐ学校始まるんでしょ？ ほら、おーきーる。叔母ちゃんを一人でさみしく旅立たせる気？」

「眠い……」

肩を掴んで引きずられそうになったので、仕方なく立ち上がり、玄関まで眠い目をこすりながら歩いて行った。時計を見るとまだ五時だった。外は薄暗く、山の端から零れた強い陽光が彼女の黒髪に反射していた。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

最後の旅立ちは、こうして終わった。三年後、彼女はカンボジアのマーケットで乱闘に巻き込まれて警官に撲殺された。打ち所が悪く、即死だった。

二年前。大学に入った私は叔母の死を聞き、ついでに叔母のアパートの家財の処分を手伝わされた。それも、親族たちが彼女の遺品を食い散らかしたかっただけで、私と母は結局なにも引き取らないままに終わった。

作業の終わった部屋から、広くなってしまった部屋の床を拭いて行った。父の実家を出てからということ、およそ十年間は住んでいたことになる。といっても、根なし草の彼女に家が必要だったかどうか、私にはわからないが。

「こんないいネックレス持ってるなんて、本当、良い御身分よね」

「ほんとほんと。こっちはあの娘らの所為でどれだけ苦労したか……」

「もらっちゃいましょう、もらっちゃいましょう」

そのネックレスは母が成人式の日叔母に譲ったものだった。いいでしょう、君のお母さんからもらったんだよ、と無邪気に笑う彼女が瞼の裏に浮かんだ。

昼食は寿司の出前を取ったが、私たちの分はなく、外で母の持ってきていたおにぎりを食べた。皺だらけのラップに包まれたそれは、弁当箱の中に二つ並んで頬を寄せ合っていた。食い散らかしは午後になっても続いた。

「すみません、これだけは私に譲ってもらえないでしょうか」

母の低い声が聞こえ、私はリビングのフローリングを拭く手を休めた。どうやら、叔母の寝室から出てきた遺品についていざこざが起きているらしかった。

「なに、こんな気持ち悪いのがそんなに大事なの」

「あの子が小さい頃からお金を貯めて買っていたコレクションなんです。これだけは……」

「高いの」

「ええ……まあ……」

女性の顔が醜く歪むのが見えた気がした。母は泣きそうな声で何度も頼みこんだが、結局それすらも彼女らの手に渡ってしまった。私はテーブルの椅子の跡をずっと見下ろしている自分に気付き、掃除を再開した。部屋に戻ってきた母を見ても、何も言えなかった。

親族の間では私たちの価値観が通じないのだと本当に理解したのは葬儀場でのことだった。母方の親戚が大勢集まっていた。ほとんどが見たことのない顔だったが、叔母の愛おしい面影のある女性は一人もいなかった。

母と叔母の母親、つまりは私の祖母にあたる人は、二人が小さい時に不倫相手と駆け落ちをして、父親に二人を預けた。しかし、将来への不安を感じた父親は海外に逃げ、二人は親戚中でたらいまわ

しになった。子供という思考の読めない存在を喜んで迎える家庭はなく、ある時は迫害じみた行為もあったそうだ。叔母は特に反抗心が強いことから親族に食ってかかり、中学生である母に身体を張って守られていたそうだ。

「あの憎たらしい娘もこれで死んだと思うと、ほっとするわねえ」

「ほんとほんと。失踪騒ぎで迷惑かけて、最後は国際問題だなんて、私たちのことどれだけ恨んでたか知れないわ」

「いろんなところで男をこしらえて、最後には子供までこしらえたらしいわよ」

「あら、それで夜逃げみたいなことしてたの、こわい」

親戚の女性たちの棘のある言葉を耳にしながら焼香を上げた。棺の中の叔母は、どこか違和感があった。死に化粧の所為だと気付いた。彼女の化粧姿など見たことがなかったのだ。それは顔の上で白い膜のようにはりついて、表情が読めなかった。私はそっと彼女の頬に触れ、指を首に伝わせ、胸元に手をかけた。親族にあいさつをしていた母の目線が不安げにこちらに向くのがわかり、手を止めた。私は、ただそこに幼い日に見た魔法使いのシルシが残っているのかどうか確かめたかっただけだ。

プリーズ
「起きて」

そう唱えれば叔母が寝ぼけ顔で身体を起こすかと思ったが、そうはならなかった。自分の心とももをつねった。心と、仏花に囲まれた彼女の顔が悪戯げに微笑んだように見えた。いつも旅立つ時に見せる表情で、内心、溜息をつきたい心地だった。

火葬場での出来事は今思い出しても痛快だ。出棺中の車内で、母と私は一言も言葉を交わさなかった。火葬場に到着すると、役員に書類を提出し、火葬の許可は下りた。

では、と役員が長い言葉のあとに棺を窯の中に押し入れていった。

「見てよ、これ。この箱、アパートを払う時に邪魔だから一緒に燃やしてやろうと思ったら、中に蛙の糞漬けが入ってたの。それでね、調べてみたら高価な蛙なんですって」

「あら、そうなの？」

「いやらしい。男に貢がせたんでしょう。まさに魔女ね」

「お金に換えてもらったほうがいいわよね、処分にもお金がかかるんでしょうし」

「迷惑料よ、迷惑料」

「そうよ。まだ足りないくらいだわ」

スイッチを入れた瞬間、私は見ていられなくなってその場を母に任せた。役員が苦々しい顔で同情の視線をくれた。出口の扉を開けようとした時、それは起こった。

「ぎゃっ」

親族の女性の一人が悲鳴を上げた。振り返ると、女性の顔に、岩ほどは巨大さのある蛙がびったりと張り付いていた。体中がぬめぬめしており、綺麗な薄緑色に彩られた皮膚にはいくつもの突起が並んでいた。それを機に、箱に入っていたビンの蓋が息を持ったかのように次々に跳ねた。中から大小の蛙が湧き、一瞬で親族の女性たちは蛙たちに取り囲まれた。喜劇だった。ひいひいと喘いで女性は顔から蛙をひきはがそうとするが、一人の力でははがせそうにはなかった。もちろん、誰も手をかそうとはせず、自分たちを取り囲む蛙に恐れをなして固まってしまった。おそらく、子蛙が親蛙に本能的に群がっているだけなのだろう。つまり、このままいけば彼女らは総じて蛙まみれになる。

「ざまあみろ」

ふと、隣をみると、不敵な笑みを浮かべた女性が立っていた。叔母だ、と思った。元の表情に戻り、それが母であることを知った。

「入れ替えておいたの。すっきりした。さあ、君子の昇天を外で見守りましょう」

外の野原に立ち、私と母は煙突から漂う灰を見続けた。叔母が、この世の自然に帰っていく。春は桜に、夏は海に、秋は土に、冬は雲になるために、一点の曇りもないあの高い空へと昇っていく。長い旅路へと、ゆっくりと歩いていく。

「じゃあね」

母がぽつりとつぶやき、涙をこぼした。私も、大学生になったというのに、子供のようにはしたなく泣いた。

火葬場に戻ると、新たな驚きが場を包み込んでいた。なんと、叔母は一片も骨を残さなかったのだという。引きだした台は何事もなかったかのように綺麗なもので、まるで魔法のような所業に、「ここに勤めて長いですけど、こんなことってあるんですねえ」と役員の男性はしみじみと語った。私と母は顔を見合わせて、くすぐったい気持になった。

当然である。彼女は魔女なのだ。

「秋の魔女」――了――

お知らせ

・この雑誌では、紹介文にもあるように、作家さんが書きたいものを書くということをコンセプトに活動を行っております。常時、作家さん、および、挿絵を描いてくださる方を募集しておりますので、企画に参加してみたいという方は、是非お気軽にご連絡ください。ご意見、ご感想も大歓迎です。

連絡先

kyourakunatuhiko@gmail.com

「参加してみたいけど、自分の実力でもいいのか...」と考えている方、そんな心配は必要ありません。

当雑誌は、書いた作品の公開の場としてご利用いただけます。素人の、素人による、素人のための雑誌、と言えば少々大げさかもしれませんが、せっかくお書きになった作品を、人目のつかぬ場所に保管しておくのならばいっそ、当雑誌で公開し、読者の皆さまから評価していただければいかがですか？

第三号の製作にあたっての〆切は、11月10日（水）となっております。ご参考までに。

過去の作品

第一号のURL

<http://p.booklog.jp/book/6839>

縦書きPDF

<http://www.mediafire.com/?fzq0tavje2rtp8>

googleサイト

<http://sites.google.com/site/doujinzasshi/>

是非ご覧ください！

この雑誌に掲載されている作品に関する著作権は、すべて著者に帰属します。

ここで指す著者とは、各作品を執筆した本人であり、編集者を指すものではありません。

編集者は、『道人雑誌』に対してのみ著作権を有するものとします。

当雑誌に掲載されている作品を、無断で転載、使用、複製することを禁じます。

使用する場合は、必ず著者本人と連絡を取り、合意のうえで行ってください。

当雑誌をお読みいただき、誠にありがとうございました。

今回が第二号です。前回の第一号の公開から、ほぼ二月も間をあけてしまうという失態ぶり。お前は何をやっているんだと罵倒されても、返す言葉もありません。こんな私に協力してくださる方々に、感謝してもしきれません。

第一号の公開の際、どれほど皆様に読んでいただけるか内心ドキドキでした。それでも日を追うごとに徐々にダウンロード数が伸びていっているのを見て心が躍りました！

しかし、皆様からのコメントがないのもまぎれもない事実。読者と作家の距離が近い雑誌と唄っても、その目標を達成するまでは遠い道のりのようです……。

これから第三号の製作に取り掛かろうと思いますが、公開するまでに、少しでも成長していけるように頑張っていきます！

そのためにも、皆様のお声をお聞かせいただけると非常にありがたく存じます。

今回はこの辺で失礼いたします。また、次号でお会いしましょう。